

まほろば【校長室だより】

[文責]

校長 江口 尋信

知らないうちに、意図せずに

「マイクロアグレッション」という言葉をご存じでしょうか。直訳すると「小さな、微細な（マイクロ）攻撃（「アグレッション」）となります。この言葉は、思い込みや偏見によって無自覚に相手を傷つける言動のことを指します。

例えば、「新入社員にしては、（この書類を）よくまとめたね。」「若いのに礼儀正しいですね。」は、これにあたります。二つの言葉の裏には、「新入社員＝仕事ができない」「若い＝礼儀が身に付いていない」という思い込み・偏見があるということです。

私は、これまで多くの失敗をしてきました。ずいぶん前に5年生を担当していた時の話です。「今から要らない机を外に持っていくから、誰か運ぶのを手伝って。」と子どもたちにお願したところ、数人がやって来てくれました。その中に、女の子がいるのを見た私は、「重いから男の子がいいかな。」と、女の子の申し出を断ろうとしました。すると、ある男の子が「先生、僕たちより〇〇さん（私が断った女の子）の方が力持ちですよ。」と言ってくれました。その瞬間、「あっ、しまった」と後悔したことを覚えています。恐らく、気付かないうちにこういったことは起こっていて、言われた側は心を痛めているのではないかと思います。しかし、言われた人は、言葉を発した人に悪意がないと分かっているから、自分が傷ついたことを言えないこともあります。

ある大学の先生は、「マイクロアグレッション」は「噂・悪口」へ、「噂・悪口」は「嘲笑・バカにすること」へ、「嘲笑・バカにすること」は「いやがらせ・差別」へとつながり、やがて「ヘイトスピーチ・ジェノサイド」といった深刻な生命・人権の侵害につながっていくと指摘しています。

私は、人に話す言葉には十分気を付けようと思っています。しかし、完璧にはできません。また、同じ言葉でも人によって受け取り方が違うので、言葉を選ぶということはとても難しいなと思います。もしかしたら、知らないうちに誰かを傷つけているかもしれません。

人と話す怖さや難しさを感じることは多いのですが、大切なことは、常に自分の中に思い込みや偏見があるという自覚をもち、自分のマイクロアグレッションに気付くことではないかと思います。気を付けても、気を付けても、つい言ってしまう、やってしまうかもしれませんが、「自覚する」「反省する」ことの繰り返ししかないように思います。

未熟な私の苦い経験をもう一つ。夏に長袖を着ていた子どもを気遣って「暑いでしょう。半袖にしてきたら。」と言ったのですが、翌日、その子どもが皮膚の病気のために長袖を着ていることが分かったのです。自分の心無い言葉に気付いた私は、すぐにその子どもと保護者の方にお詫びをしました。謝る私に、保護者の方は「先生、心配して言ってくださったのでしょう？いいですよ。娘のことを知ってもらえて有難いです。」と許してくれました。その時、許していただいたことで後悔の念がより強く残り、少しずつではありますが、自戒の念により自分の言葉に思いが至るようになりました。

私たちは、人に対してどのような言葉を選び発していくか、常に考えていきたいものです。